

## 『パウロの祈り』(ピリピ人への手紙 1章 9-11節) 2020.8.2.

<はじめに> 「私は祈ってます」(9)は力強い告白です。「祈ってください」は比較的言い易いですが、「祈ってます」を真実に果たせているでしょうか。パウロは、ピリピの信仰者たちを覚えてどんなことを祈っていたのでしょうか。

### I 愛がいよいよ豊かに(9-10)

#### ①パウロの抱く愛(8)

感情としての愛は主観的になりやすいものです。パウロは「キリスト・イエスの愛の心」でピリピの聖徒たちを思い、神の御前に探られて、なお立ち得る純粋なものでした。「愛」と称すれば全て善きもの、という乱暴な使い方を彼はしていません。

#### ②知識と識別力によって(9)

別訳で「知る力と見抜く力を身につけて」とあり、これらの力は神から与えられるものです。単なる知識の蓄積から得られる審美眼ではなく、神に聞き、教えられ、導かれる者に与えられる「知恵」「悟り」のことで(箴言 1:2,5)。これらの助けを得て愛は成長します。

#### ③正しい価値観(10)

「真にすぐれたもの」は、何にも勝って優先されることです。それは私にとって何ですか。愛の志向性が価値観が作り上げます。「真に」は、イエスの「まことにまことに」の言葉を思い起こさせます。世の終わりが近い今、この見分ける力を伴うことが必要です。

### II 純真で非難されるところなく(10)

#### ①知識の落とし穴

「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」(I コリント 8:1)。知識や洞察力を備えるようになると、自分が偉くなったように誤解しがちですが、愛は人を謙遜にします。サタンは、善悪の知識の木の実を食べさせ、神のように賢くなれる、と人を誘惑します(創世記 3:5)。

#### ②純真さ

別訳で「清い者」とあり、誠実・正直とも解されます。信仰者が成長するとは、幼子のように謙遜な態度で常に学ぼうとする姿勢に表れます。それは神の御前に問われる心の在り方です。これを追求するとき、神の御前で非難されることがありません。

#### ③キリストの日に備えて

ここでもパウロはゴールから物事を見ています。主の御前に立つその時、私たちのすべては神の御前に明らかにされます。「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます」(Iヨハネ 1:7)から、この日に備えられます。

### III 義の実に満たされて(11)

#### ①義の実

実はいのちと性質の凝縮です。どんな実を結ぶかは、どんな生き方をして来たかと密接です。キリストとつながり、この方が内に働いてくださるとき、義の実に満たしてください。イエス・キリストによって与えられるものです。

#### ②神の御栄えと誉れを現す

実育てた者の取り組みの証しであり、栄光です。私たちに見出される数々の実は、私を救い、導いてくださった主イエス・キリストの御業であって、栄光と誉れはすべてこの方に帰されるべきものです。主にあって私たちもそうなるのです。

#### ③祈りの視点

とかく私たちの祈りは近視眼的で、自分本位になりがちです。パウロの祈りは、私たちの視点を神中心、永遠の視点へと導きます。このような祈りに触れることで、私たちの視点・焦点が主に喜ばれるものへと整えられます。

<おわりに> 「あなたのために何を祈ればいいですか」と問われたとき、どう答えますか。祈りはその人の関心事と結びつき、何を祈り求めているかにその人の心と思いが見えて来ます。パウロに倣って、私たちが主の望まれる姿、主の栄光を現す者へと整えられますように。(H.M.)